

日本海海戦 100 周年記念事業 1000 人委員会主催
日本海海戦 100 周年記念歴史セミナー「世界を変えた日露戦争」

基調講演

「亡^{ほろ}びるね」

——日本における国際主義と土着主義の抗争——

平川祐弘 (東京大学名誉教授)

平成 17 (2005) 年 5 月 28 日

パレスホテル (パレスビル 3 階会議室)

本日は日本海海戦 100 周年を記念する日にお招きいただき光栄に存じます。

お集まりの皆さまはどのような関心でこの会にお見えでしょうか。皆さまは何を通して日本海海戦についての知識やイメージをお持ちでしょうか。司馬遼太郎『坂の上の雲』とか嵐寛寿郎扮する明治天皇や東郷司令長官の映画などを通してとか、あるいはさらに専門的な研究や読物を通してとかと存じます。本(2005)年はアルゼンチン海軍観戦武官ガルシアの証言も鷹書房弓プレスから訳が刊行されました。また、ここにお持ちしたのは『日本海海戦をめぐる』フランス語では 1905 *Autour de Tsushima* という各国作家の報告や感想を集めた書物でパリの Omnibus 社から本年出版され私のもとへ送られてまいりました。

日露戦争が世界史の一転換点であった、ということはこの大冊の編者ケラ・ヴィレジェ Quella-Villéger も強調しております。が、本の裏表紙には「2001 年 9 月 11 日のニューヨーク、ツイン・ビルディングの破壊にも匹敵する事件であった」と、本の宣伝文句ではありますが、書かれております。世界史を変えた大事件と申しても、それを誇らかに感じる人、感じない人、脅威として感じた人、9・11 と並べる人、と様々でございます。この本の中でも日本の勝利は Yellow Peril 黄禍である、そう主張する日露戦争へ日本軍に従って特派員として赴いたアメリカ人作家ジャック・ロンドンなどの記事も出ています。

世界史の解釈権を誰が握るか

世界史を変えた事件と申しまして、評価は一定しておりません。しかもこの歴史的評価というのは変わるし、また意図的に変えられることもございます。インドのネルー、ロシアのレーニン、アナトール・フランス、H・G・ウェルズなどに限らず、日露戦争当時、日本に来ていた中国留学生はおおむね日本の勝利を肯定的に評価したことは、周作人などの思い出に出ております。

しかし現在の中華人民共和国では、日露戦争が中国固有の領土の上で日本帝国が戦った侵略戦争の一環として否定的に記述しています。というか中国は、歴史は現在の体制に都合の好いように書くという前近代的な伝統が牢固として抜きがたく生きている国でございます。日本海海戦をどう評価するか、という問題は世界史の解釈権を誰が握るか、という問題でもございましょう。

それではその日露戦争についての私たちの記憶とはどういうもののでしょうか。私自身が日露戦争について興奮した最初は、山中峯太郎の『敵中横断三百里』を読んだ小学校低学年の時、日華事変の頃でした。兄が借りてきた本を私も読んだ後で、往年の建川斥候隊長の建川中尉が今は中將で日本の駐ソ大使となった時は、遠い過去と現在が思いもかけずつながって、奇妙な感じがいたしました。

当時の私は日清・日露の海戦を図入りで解き明

かした小学校高学年向きの書物も読みふけりました。子供心に三笠・敷島・富士・朝日以下の戦艦の名前や性能を覚えたのは、今の少年やタイガーズ・ファンがプロ野球の赤星・金本・今岡・矢野以下の打順や打率を覚えるようなものでした。別に特に軍国主義者だったのではございませんⁱ。

それでも旅順港の奇襲でもって日露戦争も始まったから次の一戦も必ずや奇襲で始まるだろうと子供心にも思っていました。それから、東京が空襲にあえば関東大震災の際の下町のように焼かれるだろうとも思っていた。桜井忠温の『肉弾』、水野広徳の『此一戦』は改造社の現代日本文学全集で戦争中に読みました。私の時代はテレビがなかったから本はよく読んだのです。

平田晋策の『日米もし戦はば』は昭和前期に書かれた作品ですが、米国艦隊が日本近海へ遠征してきたところで聯合艦隊によって壊滅されるというシナリオで、バルチック艦隊の遠征という日本海海戦の戦闘モデルが強烈に日本人の頭に焼き付けられていたことを示しています。将来の日米決戦も同じようなコースをたどるとしか思えなかった日本人の錯誤を示しております。軍人は過去の戦争を念頭に浮かべて戦うから、前でなく後ろを向いて戦う。それで失敗する、といわれておりますが、昭和の海軍軍人の多くは平田晋策レベルの発想だったろう、と思います。

しかし昭和の子供にとって海軍は憧れの的でした。小学校に上がる時、「大きくなったら何になる」と聞かれてプロ野球の選手と答える少年が昨今は多いそうですが、私は口頭試問を受けて「海軍大将」と答えたら「軍艦が沈没したらどうする」と聞かれて返事につまった。そうしたら「泳ぐね」と体育の中島先生が助け舟を出してくれました。母には返事に詰まったとは報告せず自分から「泳ぐ」と答えたといいました。中学1年の時に陸軍幼年学校を受けると申し出たら担任の三島先生が「4年まで待つて海軍兵学校になさい」とすすめてくれました。泥臭い陸軍に比べて海軍はそれだけ人気があったということです。

ニミッツ提督と軍艦三笠

しかし日本でも敗戦後は日露戦争を否定的に見る見方が表に強く出ました。私は満州事変が始まった昭和6年生れ、いま73歳ですが、アメリ

カ軍の日本占領時代に学生生活を送った者です。思想検閲をしているなどは感じました。私が中学の同級生に宛てた手紙も開封されてセロファンで貼られていました。しかしどの程度かは解らなかった。とにかく戦争が終って空襲がなくなりほっとしたのはまぎれもない心理的事実です。教室で体罰がなくなり、民主主義を歓迎する気持もあって、その時代の風潮に結構感化されました。

日本の大新聞やラジオは連合国側の戦争宣伝でもあった日本悪玉論に同調いたしました。5・15事件や2・26事件で首相や重臣を暗殺し軍部にひきずられて日本は戦争の泥沼にはいりこんだ、という認識は広く国民の間にありましたから、軍部は非難されました。平和憲法が歓迎され、さらには内村鑑三の非戦論とか与謝野晶子の「ああおとうとよ、君を泣く」がもてはやされたのかと思います。

しかしそうは申しても多少ともしっかりした人ならば、原子爆弾を投下した人道にそむく罪を不問にしておいて日本側だけを裁くのはおかしい、という気持はありました。東京裁判は茶番である、と思っており、最初に渡米した折にもワシントンの学会で、英語でそう申しました。米国の学者から反撃を食らうことも無かった。彼らとてもあれは政治的裁判であるということは認識しているからであります。

私は不破哲三氏と同じ一高の寮の社会科学研究会におりました。東京裁判の判決の放送も昭和23年の11月でしたか、一緒にラジオで聞きましたが、*death by hanging* という英語が聞き取れなかった。ラジオが悪かったというより私に英語のリスニングの力がなかったせいです。

それでもアメリカの占領はソ連軍や中国軍の占領よりはましなことはわかっていましたから、寮は共産党細胞の部屋で「赤光る星」などという昭和初年の寮歌を特に力をこめて歌ってはいましたが、私自身はソ連製の世界史解釈に服することはありませんでした。しかし唯物弁証法などという言葉の魔力は強くて、マルクス主義史観は広く浸透し、日本の歴史学界は戦後左翼に支配され、その名残がいまも教科書に色濃く残っております。

それから、私は大陸でも何度も教えて学生たちと話してわかったのですが、人民中国の日本史解釈もその派の井上清教授の解釈が支配的でした。中国の学生が読む日本史は井上清の著書の中国訳

が多い。その井上氏の本を権威に私などに反論してくるから「文化大革命の際、紅衛兵を支持したそんな先生のいうこと聞いていいのかね」とぼそつという、黙りました。

そのような左へ左へと靡いた戦後日本の時流の変化を象徴的に示したのは下痢止めのクレオソートの薬の名前の変り方です。かつては征露丸という名前でした。出征の征の字の征露丸です。満洲へ出征した兵隊さんが持参した薬です。それが戦後は出征の征は征服の征だから宜しくないというので正義の正をとって正露丸、すなわちロシアは正しいという名前に改められました。お笑い種であります、商売人というのはそういうものです。ただし、だからといって元の征服の征露丸に戻せとまで申す気は私にはございません。

軍艦三笠はダンスホールとなり、早稲田大学大隈講堂にエイゼンシュタインの映画『イワン雷帝』を見に出かけたら、映画が始まる前に「我等の祖国ソ同盟」などと甲高い声でぶつはねあがりの左翼インテリがいた時代で、しかもそう叫ぶと講堂で大拍手が湧き起こるという倒錯した時代でありました。軍艦三笠より戦艦ポチョムキンの方が大事にされたのであります。

第二次大戦中の日本が日清・日露のころに比べて品位を失なっていたことを象徴的に示すのは軍歌の歌詞の劣悪化です。「出て来い、ニミッツ、マッカーサー、出て来りゃ、地獄へ逆落とし」などと歌わせていた。そのニミッツ提督が戦後何年か経ち、見るに見かねて軍艦三笠の保存のために私財の提供を申し出られたかに聞きました。私もなにがしか出したかどうか記憶にはっきりしませんが、三笠の甲板の上質の木材を文鎮にしたものを頂きました。東大紛争の時に私の研究室を暴力学生に占拠され、その記念の品もなくされてしまい、残念に思っています。

その戦後日本というのはある意味では戦時中の日本よりもさらに閉鎖された情報空間でした。戦前戦中は検閲があると新聞には××の伏字が印刷された。中野正剛が東条首相に抗議して割腹自殺を遂げた時は伏字ながらその事態は子供心になんとなく感得できた。戦後は検閲したということがわからないようにしました。しかし私はその閉鎖された情報空間の外へ当時としては例外的に早く、数少ないフランス政府留学生の一人として昭和 20 年代の末に出ることを得ました。そのよう

な私が外国にいて日本海海戦についてふとした機会に考えたことを本日の話の枕にさせていただきます。

『ラ・バタイユ』との出会い

先ほどご紹介しました本にも、クロード・ファレルの *la Bataille* すなわち『日本海海戦』が含まれております。はじめにその読書体験から申しましょう。23 歳の私はパリで留学 1 年目の冬、フランス人の友達もまだなくて孤独でした。昭和 29 年の大晦日、フランス人は郷里に帰り、私は寮にひとりぼっち取残されてその本を読んだ。西洋人が日本をどう見ているか、という私の専門の比較文学のテーマを検証するためでした。だが読み出すと引き込まれてしまい夜を徹しました。

この『日本海海戦』には何が書かれているか。著者ファレルはフランス海軍軍人で作家、後に将官に進み 1935 年、対抗馬のクロードを制してアカデミー・フランセーズの会員に選ばれた人です。しかし今ではすっかり忘れられてしまいました。1876 年、明治 9 年リヨン生れ、日本海軍でいえば山梨勝之進大將より 1 歳年上、同じくフランスの海軍将校で作家であったピエール・ロティよりは 26 歳年下で、ロティときわめて似た経歴を辿った人であります。ちなみにこのロティのほうは、年齢は東郷平八郎より 3 歳年下で 1850 年生れです。ロティの方は明治 20 年代・30 年代からすでに世界的に有名な早熟の作家でした。アカデミー・フランセーズの会員に 41 歳という最年少の記録で選ばれました。日本に材を取った『お菊さん』とか『秋の日本』は当時広く読まれました。

ラフカディオ・ハーンはロティと同年で、ロティをいち早く英語に訳し、ロティが描く日本に憧れて来日しました。ロティによって描かれた日本はまだ小さくて、ひ弱で、鹿鳴館の時代で、西洋人に小馬鹿にされておりました。ハーンは日本に住み着いてロティが描いた日本はおかしい、日本の女を小馬鹿にし長崎で月ぎめで結婚したロティは鼻持ちならぬフランス人だと気がついて、それからは自分自身の道を進みました。

私の推察では日露戦争当時のロシア海軍将校の日本イメージはこのロティによって形作られたところがきわめて大きかったと思います。それと

いうのは当時のロシアの海軍将校は貴族の子弟から構成されていました。ロシア貴族の第一外国語はトルストイやツルゲーネフの小説などでもおわかりのようにフランス語でした。後進国ロシアにおける上流階級のフランス語の使用頻度はきわめて高かった。ポーツマスで小村寿太郎と談判したロシア外相ウィッテも記者会見の席上、「日本に賠償金はびた一文払わなかった」“Pas un sou”とフランス語で言っただけのは有名です。ロシアへ留学した海軍軍人の廣瀬武夫がサント・ペテルスブルクでロシア語のほかにフランス語の学習を始めたのはそのためです。

東山千栄子という築地小劇場出身の女優さんがいましたが、彼女も子供時代帝政ロシアで過ごしてフランス語を学んだ。ロシアの貴族の海軍将校にはフランス文化への憧れはそれは強いもので、ロシア革命後も亡命先にフランスを選ぶ人が圧倒的に多かったわけであります。

ロティはフランス人の第一等の作家でしかも自分たちと同業の海軍士官です。港々の女とのアバンチュールを異国情緒豊かに書いている。しかも 19 世紀の末年から 20 世紀の初頭、フランスでも一番人気、ということは当時の国際社会でも一番人気の作家でした。それだからロシアの海軍将校がロティを愛読したことは間違いない。というか皇太子として来日したニコライ二世やその周辺のロシア人の日本像、日本イメージそのものがロティの文学作品によって多分に形成されたものだと思います。

ロティは日本の男を愚弄し日本のムスメを小馬鹿にした。畳の家はもとより鹿鳴館の舞踏会も笑いものにした。日本人は西洋の物真似にたけた黄色い猿だという見方です。ロシア将校もおそらく同感して日本を軽く見ていたに相違ない。そのような西洋人の日本観を皆さまは不愉快にお感じでしょうが、しかしそのロティのおかげでロシア海軍が日本海軍の力を見くびっていたから、その実力誤認のおかげで日本が勝利を収め得たという側面もあった。そのように考えれば、ロティの日本に対する悪意に近い過小評価も日本の勝利に間接的に貢献したといえないこともありません。

余談になりますが、今日の地球社会で日本についてもっとも悪意に満ちたイメージが広く流布されている国は、矢吹晋先生はよく御存知かと思いますが、中華人民共和国であります。しかし日本

の中国研究者やチャイナ・スクールの人は、失礼ながらその点を余りはっきりと指摘してこなかった。100 年前は西洋では無知から日本について間違ったイメージがひろまった。現在の中国では日本について間違ったイメージを意図的に教え込んだから、誤ったイメージがひろまった。

しかし中国人でそれを訂正しようとする人が少ない。そのためにいまや自家中毒の症状を呈している。それというのは、もし訂正しようすると親日派と目される。それが恐ろしくて知日派は口を閉ざしがちである。日本にいて日本の大学に勤めている中国人も中国向けには表立って批判はしない。日本に出てくる中国語の新聞すらもあまりいわない。日本の金融界で活躍している中国系の人も大陸の御機嫌を損なうまいとして八方美人で振舞っている。後難を恐れてのことでしょうか。中華思想がしみついていて抜けないからでしょうか。このような状況は単なる無知よりもずっと性質が悪い。

言論の自由が保障されない中国などの国と日本とがつきあうのは容易なことではございません。しかし彼らが自分たちの誤った日本認識に基づいて反日暴動を起こしたら、幸いにも西洋の世論は中国批判にまわりました。だとするとロティの歪んだ日本記述が露仏同盟の間柄にあったロシアの不為になったように、中国の日本についての歪んだ歴史教育は、結局、中国の不為になるのではないのでしょうか。

ロティと異なるファレル

本題に戻ります。ファレルはロティと同じような経歴をたどった軍人作家ですが、29 歳の時に日本海海戦という当時の世界の海軍将校の誰しもの心に深い印象を残した事件に遭遇しました。その前の世界的な海戦は皆さま御承知のトラファルガーの海戦で、これは今から 200 年前の 1805 年でした。それだからロティとファレルとでは日本観が逆転した。私がパリに着いた頃はフランスの百科事典はまだ戦前のままで「日本は米国、英国に次ぐ世界の 3 番目の海軍大国である」などと出ていた。1945 年までの 30 年間は、日本海軍はフランス海軍より上に位置していたのです。外国認識と外国の実態との間には時間的にもギャップが生じがちですⁱⁱ。

さてそのフランス海軍将校 Charles Bargogne 筆名 Claude Farrère が日本に対する讃嘆の情をこめて書いたのが『日本海海戦』*la Bataille* という明治 40 年から 41 年に書き上げた作品です。決定版は明治 44 年に出版しました。作中の時は明治 38 年 4 月 15 日から 5 月 29 日までの長崎が舞台です。作者の分身であるフランス人画家、イギリスの観戦武官、イタリアの色男、アメリカの億万長者で離婚歴のあるホックレー夫人、清朝シナの大官など国際色豊かに登場しますが、日本からは侯爵依坂海軍大尉と夫人光子、攘夷思想を胸に秘めている平田大尉があらわれます。

この小説は約 3 分の 1 ほどが、昭和の初年、高橋邦太郎の手で『ラ・バタイユ』という題で訳されました。この作品は大正 12 年にも早川雪洲が演じる無声映画になりましたが、昭和 9 年にもフランスで名優シャルル・ボワイエによって映画化され、非常な成功を収めました。フランスの地中海艦隊の協力を得たそうです。後者はトーキー映画としてフランスだけでなくアメリカでも英語版 *The Battle* として上演されてヒットした最初のフランス映画だそうです。1934 年 11 月 22 日にニューヨークのクライテリオン・シアターで公開されました。小説とは少し筋を変えてあるようですが、本日の会の組織者をお願いして、一度日本でも取り寄せて上映したらいかがかと存じます。

小説とはいわゆるノンフィクションに近い。その歴史に即した面が比較文化史家である私にとっては貴重なもので、とってつけた異国趣味の色事やハラキリはまあどうでもいいのですが、しかしそれなしにはフランスでは小説も、ましてや映画も受けるはずがありません。ヒロインの依坂侯爵夫人とイギリスの観戦武官ファークソン大尉との情事と、それで名誉を失った日本軍人の切腹という話が入っているのです。

この二つだけは作り話だと著者自身、後の版の序文で認めています。戦前早川雪洲という国際的大スターは日本国内では反日的な西洋映画に出演するというので必ずしも評判はよくなかった。あるいは映画のそんな西洋人観客を喜ばすための筋立ても評判に関係したのかもしれませんが。西洋人の多くは日本人が自分たちの力だけでは日本海海戦のような大勝利を収めえたはずがないと頭から決めてかかっているⁱⁱⁱ。それで依坂大尉が妻が英国武官に身を任せることを黙認しつつ、英国武官

からバルチック艦隊に打ち勝つ秘策を学んだというお話が加えられているのです。

なお戦後、依坂夫人光子は髪を下ろして尼寺に入り二度と人前に出ずに生涯を終えることとなっており、光子の車が尼寺に入るところで小説は終わります。このきっぱりとした光子にちなんで MITSOUKO という香水が 1919 年に Guerlain から出ました。今の日本では日本海海戦も知らないくせに、この香水のブランドは知っている女の子がおります。

愛国主義的国際主義と国家主義的土着主義

私は『和魂洋才の系譜』という河出から出した書物(今は平凡社ライブラリーに入っています)の中でファレールについてすでに論じたので本席では深く立入りませんが、西洋人の作者から日本海軍を観察して何が一番大切な問題点であるのか、ということが私流に見えてきました。それをお話申したい。それは個々の戦術的な問題ではなく、皆さま意外にお感じになるかと存じますが、日本における国際主義と土着主義の抗争という問題なのです。

ファレールを読んだ当座はそこがわかりませんでした。十数年後その点が、いうならば比較文化史的に、見えてきた。そこに焦点を絞ってお話申し上げます。では日本における愛国主義的国際主義と国家主義的土着主義との抗争とは何か。それはもっと軍人さんの身にひきつけていうと、大和魂を大きな声で言うか、言わないか、という精神態度に帰着するように思います。

本席にお集まりの皆さまは、日本精神や大和魂は大切だとお考えの方が多かろうと存じます。私も大切だと思います。ただし「日本人には大和魂があるから戦争に勝てる」という必勝の信念は「日本人は日本人だから戦争に勝てる」というのと同じ無証明の理屈に帰着する危険がございます。これは庶民を激励する分には有効でしょうが、上に立つ人までが頭からそう信じこむなら一種の思考停止で、知的怠慢と呼ぶべきでしょう。大和魂は一面では大切だが、しかし反面ではそのような醒めた認識を持つことが大切だろろうと思います。

とくに日本海海戦で白人優越の神話が打ち破られた、ということを強調するあまり日本人優越の神話を作っては絶対にいけない、ということで

す。

ファレールの作品に即してその点を説明いたします。日本人の主人公はフランスの海軍兵学校出身の侯爵依坂大尉です。元は大名の家の生れということになっている。小松宮依仁親王が明治23年ブレスト海軍兵学校を卒業したとか村上格一、伊東義五郎などというフランスに学んだ一連の日本海軍軍人を想起すればいいのでしょうか^{iv}。

依坂大尉はフランス人の目から見ると隣に坐っているイギリスの海軍武官とほとんど同じに見えた、とあります。目がつり上がっていて髭が薄い点を除けば当時の日本の海軍兵学校出身者が英国の海軍士官にそっくりだとは、海軍兵学寮で教官をつとめたチェンバレンなどもいっている。イチロー・スズキがアメリカの大リーグに溶け込んでアメリカ人の選手として英語で挨拶しても颯爽としているように秋山真之大尉などもアメリカの艦隊に乗組んで米国艦隊幹部と談笑してとくに違和感を与えなかった。それと同じような様でしょう。

その秋山なども日本海海戦前夜に佐世保に家を借りて夫人を呼び寄せたことは知られていますが、依坂侯爵夫人光子も長崎に来ている。そしてそこに外国人をもてなすサロンともいふべきものを西洋の調度をきちんと取り揃えて開きました。それは日本が黄禍と呼ばれぬように警戒し文明国として振舞おうとつとめた。明治日本は、日華事変以後の昭和日本とは違って、外国人交際や国際世論を大切にしたからです。

皆さま明治村で西郷従道海軍大臣の西洋館が保存されているのを御覧になったかと思いますが、明治の指導者は外国人をもてなすことに懇ろであった。それが国際社会で日本を名誉ある地位に保つために必要なことをよく自覚していた。ただ官だけでなく民にも自発的にそのように勤める上流階級というのがありました。依坂侯爵夫人光子も、夫とともにフランスへ渡りそこで4年間暮らして社交場裡に磨き上げられた非常に西洋化した日本女性です。

ファレールは地中海艦隊勤務の艦上やツーロン鎮守府、北アフリカの港で『日本海海戦』を執筆したようですが、私はこれはファレールが実際にそのような西洋化した日本人家庭に招かれたことがあったのだと推論いたします。そうでない限り、描くことのできないような鋭い観察がいくつ

もあるからです。長崎の風物ばかりか茂木という漁村の女郎までよく書いてある。Mogi と綴るとフランス語ではモジと発音してしまう。それで Mogui と綴られていたので最初は私は茂木だとはわからなかった。

ファレールが実際に長崎に来たのは明治32年、1899年で3日間しか滞在しなかった。それだから『日本海海戦』中の長崎描写はロティの『お菊さん』の長崎描写をもっぱら転用したのだという説を Quella-Villéger は *Le cas Farrère* (Presses de la Renaissance, 1989) で述べていますが、どなたかファレールと日本の関係を後年にいたるまで、いまい少し詳しく調べる方が出てもいいかと思います。親日派として昭和になってからも日本側になにかと利用された人でもありました。『日本海海戦』の中ではその長崎の依坂侯爵家でのパーティーのこんな場面が書かれています。

依坂大尉は上品に笑うと妻光子の手に接吻した。しかしフランス人画家フェルズはそのしぐさに不器用な硬さがあるのに気がついた。依坂侯爵は毎日妻の手に接吻しているのではないにちがいない。多分客人の鋭い視線がそれを見破ったことに気がついたからだろう。依坂侯爵はいきなり強い声で話し始めた。

微妙な観察です。西洋化した日本人には家庭用の顔と外人用の顔がありますが、作者はそのそと面の下にあるものをすばやく見てとったのです。依坂侯爵は来客の西洋人に煙草をすすめた成行きで、

依坂侯爵夫人にも近づいてトルコ製煙草の箱を彼女にも差し出した。彼女は一瞬躊躇したかに見えたが、すぐいそいで煙草を取ると自分で火を点けた。侯爵は自分が妻のために火を点けてやるということを考えてもいなかったようだ。

黄色い肌と白い肌

皆さまは大砲の撃合いや水雷艇の夜襲の話をお楽しみになって本席にお見えかもしれません。ロシア側には黄海の海戦にも参加し日本海海戦にも参加したウラジミール・セメノフなどの将校がいて実に見事なリアルな記録を残している。1936

年に出たドイツ人のフランク・ティース Frank Thiess: *Roman eines Seekrieges, Tsushima* 『ツシマ』という小説も戦闘記述はセメノフに依拠しています。それなのに、ファレールの小説のこんな軟弱な話を申して恐縮であります。しかしこの依坂夫妻のやりとりの記述は根も葉もないフィクションとするには細部の観察が物理的にも心理的にもあまりに真実感があってファレールの作り話とはとても思えない。

皆さまの中にはこんな西洋かぶれの依坂侯爵夫妻に対して嫌悪感を抱く方もおられましょう。またこんな話をする平川に対し反感を持つ方もおられるかもしれません。明治の海軍部内にももちろんこんな気障な西洋かぶれに対して反感はありました。しかし問題なのは昭和の海軍部内にはその種の反感はさらに強まったということでしょう。

薩摩出身の平田大尉——作中のフランス人画家フェルズが、時勢より 40 年遅れていると評した男ですが、その平田が西洋人や西洋かぶれの日本人に反撥して、日本語でこう言ったのがファレールにも聞いてわかった。

「俺たちの肌は黄色く、彼らののは白い。金の方が銀よりも価値がある」

くだらん強がりと言うな、という方は本席にもおられるかもしれません。しかしそう言いたくなる心理は実はこの私にもよくわかるのです。個人的な体験を述べて恐縮ですが、1955 年の夏、私は前年の秋横浜から渡欧する船で一緒になったフランス人のお嬢さんに招かれて、そのお金持ちのお祖母さんのノルマンディーの別荘で過ごしました。貧乏な留学生にとって実に嬉しいことでした。海水浴に行くと、フランスの男が近づいてきて日に焼けた腕を私の細腕の隣にのばして「おや、あなたの方が白いですよ」などと冗談をいう。土地の公証人でした。

日本人はまだよほど珍しかった。それが白人のお嬢さんと一緒にいると「黄禍ですな」などと冷やかしのいう者もいました。Péril jaune 英語でいう yellow peril ですが、別に悪気はありません。そこで私も負けずに、

「神様は竈で人間を焼いて拵えた。はじめに焼き過ぎて真っ黒なのが黒んぼ、次は焼き損なって生っちょろいのが白人、その次にこんがりと上手に焼けたのが黄いろの黄色人種」

などと言って笑っていました。こんな御挨拶はかりに冗談だとわかっていても今の日本だと人種偏見だ差別語だとかなんとか目くじらを立てる人もいでしょう。しかしフランスは人種偏見がもともとアングロサクソンよりよほど少ないから、そんな馬鹿な御挨拶も気楽にいえたのかと思います。フランスのいいところは言葉狩りをする人が少ないことで、それが言論の自由を保障しているのでしょう。

排外主義と欧化主義

平田大尉の金は銀より価値があるという発言はそこまでは愛すべき強がり、パンの焼き具合にたとえた私の冗談と大同小異で、さほど違いはないでしょう。しかし昔の海軍兵学校の同期生の仲は次第に陰険となります。依坂大尉も平田大尉も共に愛国者ですが、平田は維新前からの攘夷思想をかたく守り続けている。それで四十年遅れているとフランス人に陰でいわれた。しかしこの保守的な排外主義者平田と欧化主義者の依坂大尉の友情にはだんだんと亀裂が生じます。平田にはバタくさい依坂が、もはや日本人ではなくなってしまうようで、不愉快でたまらない。それでこう言いました。

以前の君は俺と同じように外人を憎んでいた。だがいま君は外人を愛している。君はだんだんと彼らの風俗を真似、その趣味にならい、その思想を君自身のものとし、その言葉をまるで母国語のように話し、しかも絶えず同盟国人と称するあのイギリスのスパイとつきあっている。君のしていることは結構なことだ。だがしかし君と俺との間にはもはや埋めることのできない感情の裂目が生じてしまった。

このような平田大尉のほとんど生理的ともいえる感情的反撥にたいして依坂侯爵は、安政年間に米艦へ密航して米国という敵情偵察をしようと欲した吉田松陰の系譜に連なる長州藩の人として、西洋文明摂取の論理と心理を次のように披瀝します。

私はまずヨーロッパ人の頭脳をわがものとしなければならないと感じた。たとえそれが他の点でいかほど高価につこうとも、とにかく西

洋から学ばなければならぬと感じたのだ。苦心し、苦勞し、苦悩して打込んだのだ。なぜならそのことなしには日本の国の独立も、日本民族の興隆もあり得なかったからだ。大名の家に生まれ、その家で訓を受けた私だが、西洋の魂をよりよく真似るために、日本の家で習った訓を忘れようとつとめて、恥しさのために顔を赤らめたことが幾度あったことか。しかしそのたびに私は思ったのだ。患者を治療するためには病人を泥の湯の中へ漬ける医師さえもいる。そのような湯につかってこそはじめて病人は健康体を回復するのだ、と。

日本人の外国語能力

私自身はフランス文学やフランス文明に憧れてフランス語を一生懸命学びフランス政府の留学生試験を受けた者で、恥をしのんで異国の文化を学んだわけではありません。しかし後進国から来た留学生として依坂のいわんとする主張は実によくわかりました。私には依坂を気障だなどと冷やかす気持はまったくなかった。私が恥じたのは、依坂大尉のようにフランス人と自由自在に交際できないという自分の不甲斐なさでした。金もなかった。社交性にもとぼしかった。場数も踏んでいなかった。敗戦国の日本から肩身の狭い思いをして渡欧した者としては、明治の先輩の堂々たる振舞をフランスの海軍将校が賛嘆の念をこめて記述しているのを読んで感銘深くございました。

戦後 10 年、日本人留学生全体が落ち込んでいました。遠藤周作の『留学』にはその劣等感が見事に描かれています。だがこんな負け犬じゃいけないんだ。引込み思案では駄目だ。積極的に自分から打って出ろ、と思いました。しかし頑張ろうとし過ぎて逆にそれで窮屈になっていたこともありました。当時のパリの日本館で桃の節句のころにダンス・パーティーを開くのがならいでしたが、日本人学生は踊らないで受付でクローク預かり係をして、それでいくばくかの金を貰っている。しかしパリの日本館 Maison du Japon に外国人男女が踊りに集まるなら、最初は皆さん顔見知りが少なくて遠慮して突っ立っているかもしれないが、しかしバンドの第一曲が流れたら、日本の青年紳士がまずフランス人令嬢に声をかけて踊り出し、それで一夕のうたげを始めるべきではないか、

と私は思いました。

皆さんは日本の外交官や大学教授や新聞特派員はその土地の人と自由に話し合っていると錯覚しておられるが、実相ははるかに違います。今日の日本人の外国語能力を(B)相手の主張は理解できる、(A)相手の主張を、正確な日本知識に基づき、相手の外国語を用いて反論できる、という二段階に分けると、おおむね相手の主張は理解できるという(B)水準どまりです。上手に反論できない。すると反論できない自分を非としたいくない心理も働いて、“Oui, oui, c'est ça.”とか「対、対」などと相槌を打って相手の主張をそのまま是としやすい。それが実は敗戦後日本に瀰漫して今日に及んでいるメンタリティーでもありました。

ファレールの小説に描かれている明治日本に真実を感じ、昔の日本人に感動した私は読んでいうちに、自国の近代化の努力に誇りを感じ、明治の先人は偉かったと思い、それと同時に折角選ばれてフランスに渡りながら、この先輩たちのようにフランスの生活に溶け込み得ないでいる自分自身を恥しく思った次第です。ですから平田大尉に共感する気持は全然ありませんでした。精神主義者の平田は大言壮語するが参謀として無能です。このような洋行体験者の国際派と多数の国内派との対立には立身出世の問題も絡むから隠微になりやすい。

日本の宿命としての西洋化

ところで平田に非難がましい目つきで見られた依坂大尉は逆にこう問いつめました。

この対馬での海戦が敗北に終る方がよいとは日本人誰しも思うまい。敗北を喫しても構わないから日本人は昔ながらの攘夷を唱える日本人である方がよいとは誰しも思うまい。

それに対して平田大尉は皮相的に西洋化してゆく日本の将来を衷心から憂います。

しかしもし負けたならばどうする。西洋を真似てきた日本人はそれこそ猿呼ばわりされるのが落ちだぞ。またこの戦いに勝ち、平和条約が締結されたとしても、その後の日本はどうなる。君のような人たちはヨーロッパ式の頭脳や思想、ヨーロッパ式の風俗や趣味を東京へ持ち

返るだろう。日本の国民は君たちの輝かしい先例に動かされて、君たちのような趣味、風俗、思想をますます真似るようになるだろう。

ファレールの現行の『日本海海戦』と水野広徳の『此一戦』は 2 冊とも同じ 1911 年、明治 44 年に出た本ですが、ファレールにあって水野にないのは、というか多くの戦記物に欠落しているのは、このような日本の「宿命としての西洋化」とそれに伴う心理的な問題の考察かと思います。ちなみに水野広徳が国際問題に目が開かれるのは第一次世界大戦の後からです。

さて国家的危機の際には「日本人は大和魂を持つ」という主張が声高に説かれます。ここで大和魂という問題が浮上するのは日本人のアイデンティティーにまつわる自覚がその言葉によって表現されるからでもあるのです。それが日本人にとって傷つきやすい微妙な問題となりがちなのは、日本人が外から迫られて物質的にも精神的にも西洋化を余儀なくされているからでもあります。西洋化の過程で日本人としての誇りが傷つけられることはいろいろあるからです。

ファレールの作中人物は産業化の功罪を長崎の風景描写にからめて語ります。港内の出島や大波止などの町並の続く東側と比較して西側をフランス人画家フェルズは見ました。

西側にはほとんど家が見えず、山々の緑の衣がそこではそのままその緑の裾を海にひたしていた。西側の山々はごつごつして刻み目が深く、東側の山々よりもはるかに日本風で、昔の墨絵の画家が和紙の巻物に描いた風景画のそれも極上のものを思わせた。しかしその西側の丘の間に谷間が一つあった。それは黒い、無気味な谷間で、そこからは昼となく夜となく工場の濃い煙がたちのぼり、ハンマーの音が喧しく響いていた。それは長崎造船所であった。その工場はいま日本を守るために全力をあげて武器を造り艦船を造っている。フェルズは桜の咲いた遠くの山を眺め、また山麓のこの造船所を眺めた。「多分これのお蔭であれも救われるだろう。だがそれにしてもなんという損害であることか！」

画家フェルズの目には三菱の長崎造船所とその煤煙、そしてそれに象徴される近代西洋の技術

文明が、大和の国の美しい自然や醇朴な風俗を破壊する害悪として映じました。しかし造船所は活動を停止しない。それが日本を救う艦船を造るからです。それは日本を救いもし、長崎を破壊しつくしもした。事実、三菱の長崎造船所はそれから 37 年後には世界最大の戦艦武蔵を建造した工廠でした。そしてそのような工廠があったがためもあって昭和 20 年 8 月 9 日、長崎には原子爆弾が炸裂しました。しかし長崎市の復興そのものが造船産業に負っていたのです。一時期は巨大なタンカーを造る三菱のおかげで市民の三割近くがその生計をたてていました。

そのような産業化の功罪については別に論ずるとして、画家フェルズは造船所と桜の咲いた向うの山を見比べて「多分これであれも救われるだろう」多分この軍事力のおかげで美しい日本の自然も救われるだろう、と呟きましたが、当時の日本人にとって殖産興業を選ぶのは自明の選択だったと思います。

いま日本の敗戦後、外国の作家を経由して日本の過去と親しくなった話をいたしました。それでは戦前、私の幼年時代、日本海海戦とはいかなるものであったか。その面からも考えて見ましょう。私は小学校に 1938 年、昭和 13 年に上がりましたが、その東京高師付属小学校の講堂には左右に大きな額が掛かっていました。その一つは乃木希典陸軍大将の書で、いま一つは東郷平八郎海軍大将の書でした。68 年後のいまその額がさてどうなっていますことか。

その昭和 10 年代には日露戦争を実際に戦った方々がまだご存命で、海軍記念日に小学校の講堂にお話に見えました。対馬海峡でロシアのウラジオ艦隊に撃沈された軍用船に乗り合せた兵隊さんのお話が子供心に印象深く残っております。バルチック艦隊が対馬海峡や津軽海峡を通ってウラジオストックに入り込んだら大変だったろうな、と小学 2、3 年生のころ思ったことでありました。その時すでに日本海海戦はそれはそれはたいへん古い昔のことだと思っておりました。ところがその昭和 14、5 年当時から逆算してわずか 34、5 年前のことでした。

しかしその日露戦争と太平洋戦争の三十数年間の間に日本がどのように変わってしまったか、それはなぜかについてそれは後ほどふれさせていただきます。

島田謹二先生の講義と著作

次は敗戦後、日本の学者を経由して日本の過去と親しくなった話をいたしましょう。私が東京大学で学んだ恩師の一人は島田謹二先生で、本席にお集まりの皆様は島田先生の『ロシアにおける廣瀬武夫』と『アメリカにおける秋山真之』をお読みの方も多いかと存じます。この二冊が日露の海戦を戦った明治の海軍軍人の外国体験を語ってもしっかりと見事な研究でありかつ読物であるかと存じます。司馬遼太郎の『坂の上の雲』にも『ロシアにおける廣瀬武夫』に触発されて書かれた部分がかかなりございます。司馬氏も島田先生に格別の敬意を表しておられました。

その島田先生が世間で軍神として奉られた廣瀬武夫とは違う血の通った廣瀬を発掘されたのは昭和35年8月7日竹田の廣瀬神社の御神体となっていた行李の中を見られた時でした。軍神廣瀬は旅順港外で怨みぞ深し、一片の肉の塊を残して戦死しましたから遺骨はございません。しかし廣瀬はよく手紙を書く人でしたから、御神体の行李には廣瀬や廣瀬家が受取った手紙がいっぱいはいつておりました。その中には交戦国のロシアから廣瀬の兄嫁あてに送られてきた英雄ヒロセの死を吊うドイツ語でしたためられた女性の手紙もはいつておりました。そうした手紙を読み解くことで人間廣瀬の生き方がまざまざとよみがえったのです^{vi}。

私はちょうどそのころ5年間のヨーロッパ留学から一度戻って職も見つからず島田先生が大学院で廣瀬あての手紙を解説する演習に出ていました。世間は安保反対の大騒動の年でしたから海軍軍人を授業に取り上げるというのは実に反時代的な当時としては破天荒のことでした。しかし私は自分自身の外国体験に照らして廣瀬の外国体験が身近に感じられ、島田先生の佐藤春夫『法然』とか『藤村詩集』の授業などよりよほど面白かった。それというのも先ほどの依坂大尉と平田大尉という二つの人間類型の中で廣瀬武夫はむしろ依坂に近い日本男児だからです。そして島田先生がしみじみとした口調でいわれたのは「軍神などという類型にはめられてしまうと、半世紀前の日本人が今の世間にはかくもわからなくなってしまうものか」ということでした。

それで私もお手伝いしたいと思い、遠縁の山梨勝之進大將を島田先生に御紹介しお話をうかがう会を東郷神社を借りて企画しました。すると「大將の話でなく二等兵の話なら聞きに行きます」などという返事をよこしたのがいる。それが昭和30年代半ばの風潮でした^{vii}。『ロシアにおける廣瀬武夫』の出版記念会の席で、若き日の山梨大將が日露戦争前夜軍艦朝日で用談した、男でもむしゃぶりつきたくなるような人間的魅力に富む先輩廣瀬の思い出を語られました。私が「島田先生は大和魂がある学者で」とその席で御挨拶したら、戦後の日本では大和魂と口にするのはタブーで皆びくった、という感じでした。同輩から「よくあんなことを言ったなあ」と後々まで言われました。

私自身は『西欧の衝撃と日本』や『平和の海と戦いの海』という書物で廣瀬や秋山の先輩や同期や後輩の斎藤実、鈴木貫太郎、山梨勝之進、堀悌吉などの事蹟を調べました。そのような私の仕事を目に留められ、ご面識はなかったのでありますが、本日の会の発起人の中島洋様から本席でお話するようにとお声をかけられたと先ほど伺いました。

しかし私は不肖の弟子でありまして、島田先生のように丹念に実証的に明治の海軍軍人の実態を調べ抜いたことはないのです。島田先生は89歳の時に第3作『ロシア戦争前夜の秋山真之』という1246ページの大冊を1990年5月28日に朝日新聞社から刊行されました。この講演を依頼され、島田先生の第3作をあらためて読み通し、70代から80代という高齢のお仕事であるにもかかわらず、記述の数字の細かく具体的であることに驚きました。そして読みながら、やはり明治の軍人と昭和の軍人とは違うと感ずる節がありました。

明治の軍人と昭和の軍人

近年の日本史の大切な論争点の一つは、この明治の軍人と昭和の軍人とは果たして違うか否か、ということにございます。西尾幹二氏は明治の軍人と昭和の軍人はそれほど違うはずはないとして、『坂の上の雲』で興隆期の明治日本を見事に描いた司馬遼太郎が昭和の軍人を貶めていることに対し違和感を表明されたかに記憶いたします。司馬氏が『坂の上の雲』で明治を肯定しながら、昭和を否定的に見た評価に対し疑義を呈する向きは

他にもおられます。

司馬さんは読者に受けやすい明治という興隆期を昭和 40 年代に描いた。当時の日本は高度成長期で国民の自信も回復してきた。それだから流行作家として受けました。しかし日本人一般読者がいやがる『坂の下泥沼』を具体的に分析しなかった。そこが司馬氏のずるさでもあり、それだから司馬氏は誤解されました。が私は明治と昭和とはやはり違うと感じます^{viii}。

では明治と昭和はどこが違うか。まず国のトップの指導者について考えてみます。伊藤博文、西園寺、山縣らの幕末維新の活動家は直接外人と接して鍛えられました。彼らは敵を知り己を知っていた。近衛文麿、平沼、東条、小磯など昭和の政治家は、より完備された学校教育を通して外国について習いはしました。しかし東条首相らの世界知識は、スイスに駐在したことはあるけれども外国語で外国人と親しく接した人とはとても思えません。英語でトルストイなども読み英国公使館に遊びに来ては玉を突いていた伊藤博文等の外人交際にはとても及ばない。東条の世界知識は日本製でした。それで世界認識を誤った。

しかしこれは日本の新聞も悪いのです。東条という人は真面目な勤勉な几帳面な人で新聞を丹念に読んで、線も引いて、スクラップまで作っていた。そして新聞を読んで自己の正当性を信じていた。しかしそれだから間違っただけではないでしょうか。戦後の日本の政治家でも『朝日新聞』の社説などを丹念に読んでいた政治家で、そのために間違っている人も沢山おられます。民主党の岡田克也氏も、いや在日中国大使館の諸氏も『朝日』の社説の読み過ぎて間違っただけかと推察いたします。

次に明治と昭和で軍人も変質いたしました。明治の海軍は国際派ナショナリストが要職を占めてリードいたしました。日本海海戦を戦った旗艦三笠以下は英国製です。私は先日 *Japan's Love-Hate Relationship with the West* (日本と西洋との愛憎関係) という書物を英国の Global Oriental から出しましたが、ここにお見せするカバーは三笠艦です。日英同盟が結ばれていた間は英国の造船所で造られた三笠はまさに日英友好のシンボルでした。日本の士官は西洋に渡り軍艦を受領し日本に回航しました。その外国体験で多くを学習したのです。

しかし英国が仮想敵国となるに及んで日本が

聯合艦隊の旗艦を英国に造ってもらったということが逆に恥となる^{ix}。しかしイギリスはいまでもミカサを造ったことを誇りにしている。それだからヴィッカーズ・アームストロング造船所のあったバロウ・イン・ファーンネスの町には Mikasa Street という地名が今日も残されています。それで私は三笠艦を日英の愛憎関係のシンボルとして拙著 *Japan's Love-Hate Relationship with the West* のカバーに選びました。

それに対して昭和の日本では軍艦は日本製です。それは一面では大進歩でした。日本人の愛国心は満足しました。技術屋は単純ですから誇りに思い喜びました。しかし日本の海軍軍人もまたメイド・イン・ジャパンとなって敵を知らなくなったという致命的な欠陥をもたらしたことを忘れるべきではありません。

愛国的国際主義と土着的国家主義の相克

先ほどの書物の依坂大尉と平田大尉という両極端の二人の日本海軍軍人像はファレールの手になる造形でしょうが、典型的な類型であることに間違いはないのです。だが依坂的な日本人は政府の首脳にも軍の首脳にも次第にいなくなってしまいました。山本五十六は太平洋戦争を戦った日本海軍の軍人の中で日本海海戦にも参加した唯一の人かと思いますが、国際派であります。依坂と平田とどちらのタイプかといえば依坂です。西洋女性と社交ダンスもなども巧みに踊った人ではないでしょうか。

白人女性は黄色人種の男からダンスを申込まれると「疲れています」 “No, thank you. I am tired.” などと断る。それでいてそこに白人の美青年が現われるとさっと応じて踊る。それで日本の男はすぐ怒ってパーティーに行かなくなってしまうが、山本はそれで怒ってはいけなく、断られても断られても執拗に申込まなければならない、などと若い日本軍人にアメリカ人との交際法を諭しております。

そんなダンスの話などどうでもよい。もっと軍事に密着した話をせよ、とお叱りを受けそうですが、しかし私は軍事史の専門家でもないから、また軍事技術史以前の根本的な問題把握で日本人の多くは間違っただけと考える者ですから、その点について常識論をお話しましょう。たとえば

太平洋戦争について渡部昇一氏などは「もしミッドウェイの海戦で日本が勝っていたなら、日本が戦争に勝っていたかもしれない」という仮定をなさいました。本席にもそうした希望的観測の考え方の方はおられると思います。

しかし第二次世界大戦の特色は生産戦であった。双方があらかじめ定められた駒数の軍艦で勝負を競い合ったのではない。日本海軍は開戦当初アメリカが所有していた7隻の空母はことごとく撃沈破しました。そうしたけれども、1945年8月、アメリカはなお20隻の正式空母を活動させていた。戦争中にアメリカが新造した航空母艦は26隻、日本は7隻、護衛空母にいたっては、アメリカは110隻、日本は7隻という大差でした。

そのような生産戦の時代なのだという認識が徹底していれば、また日本の経済力という見地から考えれば、5・5・3という比率はむしろ日本に都合が良い面もあった。しかし「米英がそれぞれ日本の6分の10で我慢している。そういう風に考えればよいではないか」などという発想には、数の公平が好き日本人は不満でたまらなかった。そういう風に頭はまわらず、米英がそれぞれ10で日本が6という数字は不平等でけしからん、と小学生の私は子供心にも思っていました。

ちなみに「米英がそれぞれ日本の6分の10で我慢している。そういう風に考えればよいではないか」といってワシントン会議の決定に反対して激昂する若い海軍士官を諭した古賀峯一は、山本五十六聯合艦隊司令長官の戦死の後、その職を継いだ方です。1年後に戦死されました。山本五十六ももちろんワシントン会議の軍縮に賛成いたしました。軍縮に賛成の本省の赤煉瓦組と反対の艦隊派の対立などということが言われましたが、日本海海戦が歴史的な戦史のモデルとして頭にこびりつき、開戦時に現存する艦艇の勢力で海上で雌雄を決しようという戦略に立てば5・5・3ではこちらは飛車角落ちで勝負するから不利でいやだと思うのは当然でしょう。だがアメリカというのは、いってみれば手もとに鉋や鑿や木材を持っていて、飛車や角を次々に彫っては盤上に打ってくるという手に負えぬ相手、先ほど申した数だけの航空母艦を戦時中に造った相手だから物質的には勝てるはずはありません。

するとそこで何を日本側は言い出したか。物量でかなわないと思った時に日本人が言い出したの

は精神力であり大和魂です。その点を日本における愛国的国際主義と土着的国家主義の相克という観点から、より平明に申しますと「大和魂」という言葉を手がかりに、日露戦争前後の日本人の外国に対する心理の推移を考え、そのメンタリティーを分析することで、将来の資といたしたいと存じます。

洋行と明治の日本人

先に述べた愛媛松山出身の秋山真之は、薩摩出身者が主流を占める明治の日本海軍の中で、その優れた能力によって頭角をあらわした人物であります。司馬遼太郎の『坂の上の雲』はさまざまな意味ですぐれた作品であります。秋山という海軍軍人を軍人の世界の中だけで見ていない。秋山と正岡子規を同列に並べて、軍人も文人もひとしく明治の俊秀としてとらえたことによって日本人読者の視野を拡げてくれた、と思います^x。

戦前の軍部に限らず戦後の日本の作家たちにもお山の大将が多かったが、『坂の上の雲』の司馬氏はその捉え方が違いました。松山出身で1868年、すなわち明治元年生まれの秋山と、それより1年先に同じく松山で生れた正岡子規との交流が書いてある。軍人と文人の世界が二つながら語られている^{xi}。では文士の正岡子規と軍人の秋山真之の関係であります。

君を送りて思ふことあり蚊帳に泣く

とは明治30年、病牀2年目、幼友達、秋山真之が海軍から派遣されて洋行することが決った時の自分の気持をそのまま五七五にいたしました。この句は子規が新聞『日本』に、「秋山真之ノ米国ニユクヲ送ル」の言葉を添えて掲げた句です。

なぜ蚊帳の中で泣いたか、明治の有為の青年にとって欧米へ行き、先進国の文化を学び祖国に伝え、後進国である自国の発展に寄与することは男子一生の大事業でありました。1歳年下の秋山にはその機会が与えられた。しかし結核性の腰椎骨のカリエスを病む正岡にはそんな夢は叶えられないべくもない。正岡はもともと外国の地図に旺盛な関心を示した男で、日清戦争の時は新聞記者として戦地に赴いて無理が祟って軍用船の中で喀血し結核が発病した。それほど日本の外の世界も見たかった正岡です。それがいまは昼夜疲労の体で臥

せている。それで蚊帳の中で泣いたというのであります。軍人という危険を伴う職務に就く友人の身の上を心配して泣いた、というのではもちろんございません^{xii}。

ところで「洋行」という明治日本人の最大の関心事から話を始めましたが、この洋行ということとは外国を自分の眼で見る、ということでもあります。孫子の兵法の言葉を借りれば「敵ヲ知ル」ということです。吉田松陰はそのために下田でアメリカの船に乗り込んで米国へ行こうとした。今日でもその必要に変わりはありません。昭和 39 年以後は日本人の海外旅行は JAL パックという形で商品化され、海外で何を見、どう感じるべきかまでパターン化されてしまいました。

日本のチャイナ・スクールの極端な人は中華人民共和国を礼賛して新中国には蠅もいなくなったと申しましたが、観光客が行くようになってからはそんな誤った中国認識はさすがに減少しました。しかし日本人の外国知識が JAL パック程度の認識で留まってるのでは、心もとない。私のお話は我々は相手を知り己を知らなければならない、という海外体験ないしは海外偵察ないしは敵情偵察の意味と、そのような世界の中に生きる日本人としての自尊の意味についてお話申したい。

それも相手を知るだけでなく、その相手に対しても納得的に相手の言葉を用いて説明できる能力を身に着けなければならぬ段階に来ているということをお話したいのです。皆さまご承知のように、日本の運命は日本だけで独りで決めることはできません。それは日本海海戦の時もそうであったし、100 年後の今日においてもそうであります。

それでは日本海海戦までの日本海軍と、それ以後の日本海軍とは質的な差異があるか、と申すと、一面における日本の進歩が他の一面における日本の退歩をもたらしたように思えてならないのであります。

Made in Japan

先ほども申しましたが、日本の産業化が進み、主力艦も次々と made in Japan となりました。これは一面における進歩であります^{xiii}。しかし日本の軍艦が日本製となるに及んで、世間はあまり意識しなかったが、日本の海軍将校の西洋体験も変質し始めました。海軍将校もいうならば日本製と

なったからです。以前は made in Japan とはおよそいえなかった。日露戦争を戦った海軍の首脳は海軍兵学寮などで英国海軍将兵から習った。国歌斉唱の訓練の時、君が代でなく God Save the Queen を歌った、という滑稽なほど徹底した英国流の教育を受けたことさえありました。

しかし彼らは日本人である。武士が、士族が、日本と英国と一身二生の教育を受けたところに明治の軍人の強みがあった。より正確にいうとそのような世界を見通すことのできる、今の言葉でいえば bi-cultural の教育の良い面を身につけた人が要所要所を占めることができたから、明治の日本は国際情勢の荒海を上手に舵を取って乗り切ることができました。

具体的に申すと、明治の軍人と昭和の軍人とは違う。西洋製の軍艦の受領に西洋に行った。その向うの造船所では日本人の思いもつかなかったストライキもある。そうした社会を見る眼を開く体験を広く海外で積んだ世代と、それ以後の世代ではやはり人間の出来が違う。日本人は日本製の大艦大和を誇るうちに、世界が見えなくなり、戦いに踏み切った。明治の生き残りの鈴木貫太郎などには世界の中の日本の実力が見えていたから、彼らが終戦に持ち込んでくれたということをゆめ忘れるべきではありません。

日本製の主力艦大和が聯合艦隊の主力となるや、日本の技術に対する信頼とともに大和魂に対する過信や自惚れが生じました。「戦艦大和は沈まない。大和が沈む時は日本も沈む時だから、大和は沈まない」というような論理が乗組員の間で囁かれました。それが心の支えとなったのは前提として「日本が滅びるはずはない」という日本不敗の神話が信念として分かちもたれていたからです。

日本がアジア大陸から朝鮮海峡によって離れていたから、大陸からの軍事支配の手が及びにくかった。そうした地理的与件のことは話題とせず、万世一系の天皇をいただく日本は特別の国のように思い込んでいた。日本人には大和魂がある、それだから日本が勝つ、などと私などは子供心に教え込まれました。そんな風にして我と我が国を励ます言葉は、大和魂に対する信仰のメカニズムを示しているかと思えます^{xiv}。

日本は尚武の国ですから土着主義的愛国主義はもともと強かった。日本で産業化が進み自信がつくとさらに強くなった。ちょうど今の大陸中国

のようなものです。愛国主義が頭をもたげ始めやすくなった。日本精神とか大和魂とかいえば聞こえはよいが、世界を知ろうとしない井の中の蛙たちの叫びがかしましくなったのだと思います。自己中心的な自己正当化、自己絶対化の傾向の強い甘やかされた正義漢ほど始末の悪い者はありません。

昭和維新の志士などと一部マスコミが誉めそやした 5・15 事件や 2・26 事件の青年将校は軍縮に賛成した重臣たちを殺害することで事実、日本を亡ぼしました。外国の力があるがままに認識することこそが勇氣ある行為なのです。対米戦争に反対したり、日本に終戦をもたらした真に勇氣ある海軍軍人が、日本海海戦で魚雷艇で偉功を立てた水野広徳や鈴木貫太郎であったことは、主観的な強がりをするものの好きな、日本人一般の精神の弱さを逆に示しているかのように思われます。

島田謹二『ロシヤ戦争前夜の秋山真之』という書物の冒頭には、お配りしたハンドアウトにあるような秋山真之の評が掲げられています。まず秋山が薩摩出身の海軍軍人一般を批評した言葉があり（「鹿児島人ノ通弊トシテ自他ヲ計較考慮スルコト乏シ。眼界第二人称迄ハ及ベドモ、動モスレバ第三者ヲ漏スノ患アリ」）、ついで同じく薩摩出身の財部彪との比較で秋山は自分の特色を、

事ニ臨ミ変ニ触レ大和魂ヲ暴露セザル点ハ予（秋山自ラ云フ）君ニ優レリト信ズ

と明治 30 年 8 月 11 日の夜、太平洋を渡る英国の汽船コブチック号の船上で述べました。このことは財部の日記に記されています。秋山は薩摩の軍人は自分と相手とを比較考量しない通弊があると指摘しました。まして第三人者がどう見ているか、など眼中にない。これは薩摩の特性かもしれないが、主流でない愛媛出身の秋山には強く意識されたことでしょう。

それでは「事ニ臨ミ変ニ触レ大和魂ヲ暴露セザル点ハ予君ニ優レリト信ズ」とは何を意味するか。暴露という言葉は「旧悪が暴露する」などという用法からも類推されるように決していいニュアンスはありません。しかし大和魂は海軍軍人にとっては肯定的に受取られている精神的価値であります。それで「事ニ臨ミ変ニ触レ大和魂ヲ暴露セザル点ハ」などという文面に接すると私ども解釈に迷うわけであります。小堀桂一郎氏に聞いたがわ

からなかった。

私の解釈は非常事態に際し合理的な解決法が見つからない。すると無闇に大和魂を唱え出す者がいる。日本は武力では劣っていても大和魂があるから勝つ、という信念を唱える者が薩摩の海軍軍人には多い。それに対して秋山は、私はそのような強がりはいわない。その点、秋山は自分は財部君、君より優っている、と忌憚のない見方を述べたのだと思います。財部はその秋山の自他の評価に感心したからこそ秋山の人物評を日記に書き留めたのではないのでしょうか。これは留学途上の船で親しい仲であったからこそ言えた人間観察かと思えます。

明治の中葉、世間一般は大和魂を鼓吹することは愛国的であり良い事だと信じていた。いや、本席にお集まりの方の多くもそうお考えでありましょう。そのような先入主が強いと、「事ニ臨ミ変ニ触レ大和魂ヲ暴露セザル点ハ予君ニ優レリト信ズ」という言葉の意味がわからなくなってしまいます。秋山は大正 3 年、郷里の松山での講演でも「戦術とか勇氣とか言うものの、数字的な努力は争われぬ」（『日本海海戦随想録』）と合理的な発想の重要性を強調しております。

「大和魂」という言葉

新渡戸稲造は武士道こそが日本の魂であるということを英語で主張して非常に受けました。

Bushido, the Soul of Japan は北清事変の最中に書かれ、日露戦争で日本が勝利をおさめるや西洋で爆発的に読まれました^{xv}。

このように見てくると大和魂を唱えることは良いことと悪いことと両義性があることがわかる。良いとしても、どこに問題点が潜んでいるのか。

幕末維新に際しては尊皇攘夷が盲目的に唱えられました。日清・日露の役に際しては大和魂が声高に唱えられました。大和魂も日本精神を唱えることも必要でありましょう。しかし日露戦争に際して要路の人は我武者羅な排外主義に陥ることなく、世界の中の日本を常に意識して行動いたしました。10 年前の三国干渉の記憶が鮮烈に刻まれていたからであります。国際環境に対して非常に気を使った。

だが日本が対馬の海戦で空前の大勝利をおさめるや、大和魂が物質的な力を超越するなにか特

別のもののようにみなされ始めました。そのような感情的な風潮の中で我が国の知性的な国際主義は翳りが見えだしたのだと思います。夏目漱石は明治 38 年『吾輩は猫である』の中で大和魂を唱える人の空威張りをこう冷やかしました。

大和魂！と叫んで日本人が肺病やみの様な咳をした…… 大和魂！と新聞屋が云ふ。大和魂！と掏摸が云ふ。大和魂が一躍して海を渡った。英国で大和魂の演説をする。独逸で大和魂の芝居をする…… 東郷大将が大和魂を有つて居る。肴屋の銀さんも大和魂を有つて居る。詐欺師、山師、人殺しも大和魂を有つて居る。大和魂とはどんなものかと聞いたら、大和魂さと答へて行き過ぎた。五六間行つてからエヘンと云ふ声が聞こえた。

大和魂が国内ばかりか外国でも話題になっていることを漱石は知っていました。新渡戸の *Bushido, the Soul of Japan* が読まれ出した。学生仲間だった岡倉由三郎が英国で英語講演したことも耳に入りました。しかし大和魂を唱える日本人の心理に劣等感の裏返しとしてのナショナリズムの空疎な強がりを感じ取っていました。『吾輩は猫である』の六章の末尾に出てくるこのカリカチャーは読者の笑いを誘うように書いてある。「大和魂はそれ天狗の類か」という台詞で締めくくられています。

しかし漱石は日本海海戦の後、『戦後文界の趨勢』という談話で、大和魂を無闇に唱え出した日本人の心理についてこう述べています。

吾々は「大和魂」——又は「武士魂」といふことを今までも口にしたが、然しこれを今日まで無暗に口にしたいふのは、或必要から出たのではあるまいか。これを事実の上に現する事なしに、その声をして高からしめんと叫んだのは、一方に精神の消耗といふ事を思はせるのと、一方には恐怖といふことを抱いたが為ではあるまいかと臆測するものがあるのも余儀ないことになる。自信があつていつたのではなくてその精神の消耗を杞憂する恐怖といふ語の呼び換へられた叫びであると思はしめたのも余儀ないのである。

これは談話筆記だから文章がもってまわって長くなったのでしょうか。それとも 100 年前の日

本では「大和魂」を批判することはタブーに触れることに近かったからでしょうか。それで漱石は「余儀ない」の語を二度も繰返しました。そして文意の明瞭さを欠きながら、それでもなお言わずにいられないなにかがあつたのではないのでしょうか。

そうした思いが胸中に秘められていたからこそ明治 41 年『三四郎』の中の広田先生は「いくら日露戦争に勝つても、だめですね」と平然といい、反論する若者に向い「亡びるね」といったのだと思います。世間は漱石一流の逆説的表現かと軽く読み過ごしましたが、その予言は不幸にも 40 年も経たぬ間に的中いたしました。

日本海海戦の前と後で日本はどのように変わったか。日露戦争を戦った日本人も第二次世界大戦を戦った日本人も、それなりに愛国者でありました。別の言葉でいえばナショナリストであつた。しかし日露戦争の際に国家の指導に当った日本の政治家・軍人と昭和の日本で国家の指導に当った政治家・軍人の間にはやはり違いがあつた。明治 37、8 年の日本は政府と軍と意思疎通がよくまとまっていたけれども、昭和の日本は、軍部は勝手に動く、政府は軍部をコントロール出来ない、というまことにみともない国家であつた。それから同じく愛国的なナショナリストが国を指導したといつても、1904 年とその 35 年後の日本とではナショナリストの質が変っていた。

明治日本の特色は、政治や軍事の要職を国際派ナショナリストで占めていたことだと私は考えます。当時の日本の国際派は多くはいなかった。しかし彼らが鍵を握っていた。キー・ポジションを占めていた。そのことが大切なのであります。そのお蔭で西洋帝国主義の時代に日本は生き延びた。また戦争の指導について考えると明治と昭和では大違いである。陸奥宗光の『蹇蹇録』を読むと、日清戦争の前後、外交と軍事の指導が有機的に行なわれていたことがよくわかる。外交というのは相手があることですから国際的視点を持たなければならない。軍事とても敵がいることですから相手との相対的な力関係を判断せねばならない。

ところが満州事変以後はてんでんばらばらでした。満州事変そのものには良かれ悪しかれ日本の関東軍に計画性があつた。軍事的・短期的には大成功でしたが、国際政治的・長期的には大失敗でした。それはまさにその成功によって日本が軍

部の発言力の強い国と化し、政府と軍部とばらばらの国になってしまったからで、私は昭和前期の日本はみつともない国であったと思います。そのために日華事変以後は時の勢いに流されて日本軍はゲリラの泥沼にずるずると引きずりこまれてしまいました。

日本海海戦は世界の日本に対する認識を変えました。それは同時に日本をも変えました。世界の中の日本について客観的に自己を見つめることを蔑ろにするようになりました。日本はもはや少数の国際協調主義のエリートが支配する国ではなくなり、自己陶酔的な土着主義が抑えがたく強くなった。秋山真之はワシントン条約の2年前に亡くなりましたが、生きていたらどの立場に立ったでしょう。

大和魂はすばらしいと自画自賛すれば景気は良くて結構のようではありますが、そうした主観的な精神主義者が海軍部内に強くなった時、山本五十六はそうした風潮を苦々しく思ったからでありましょう。駐米大使館付武官として、ポトマック河畔に咲くかつて尾崎行雄が東京市長時代に贈った桜の苗木がいまは花を満開させている絵葉書を郷里の恩師に送り、こんな文面を添えました。

当地昨今吉野桜満開、故国の美を凌ぐに足るもの有之候。大和魂また我国の一手独専にあらざるを諷するに似たり。中央巍然たるはワシントン記念塔。

アメリカ通の山本は日本に大和魂があるなら、アメリカにはアメリカ魂があるぞ、と言いたかったのです。

国際派と土着派の隠微な抗争は各界にございます。これからますますふえるでしょう。東大の外国研究の名誉教授で国際会議に絶対出ないお山の大將もおられます。井の中で正論を叫ぶ土着派の蛙はおよそ男らしくない、最低だと思えます。しかしひたすら外国に追随する国際派も見識不足です。相手の外国語を理解し、相槌を打つだけなら簡単だが、問題は外国語を駆使して反論し相手を説得することです。だがそんな国際派ナショナリストは稀なのです^{xvi}。戦後の日本は組織的にその種の人材を育成し外国に対応することを怠ってきた。しかも昨今の日本人にはその種の訓練や能力や自信が欠けている。そうした意味で今日の日本の国防力には問題があるということを申し述べ

て本日のお話を結ばさせていただきます。

結論は日本人に大和魂は必要である。しかし秋山真之や山本五十六などが日本海軍で一番問題のあるのは大和魂、大和魂と言い立てる連中だ、と心中ひそかに感じていた、ということ、そして日本海海戦の勝利が日本人に大和魂ということをやよいよ言わせるようになった。そしてそのような態度が日本の歴史を変え、日本を第二次世界大戦の敗北へ追い込んだ、そうした見方も可能であるということを申し述べて終わりといいたします。

注

i 日清・日露の戦争では宣戦の詔勅に「天祐ヲ保有シ」と天祐の祐が佑でなく示す偏で、祐弘の名前の祐と同じ、とか伊東祐亨司令長官の祐も私と同じなどということも子供心には残りました。ちなみに大東亜戦争では天佑と佑が人偏になりました。神頼みでなく人頼みで勝てるのかな、などと思わないでもなかった。しかし人間は非常時になると東郷平八郎とか山本五十六といった聯合艦隊総司令官に非常な信頼を寄せる、聯合艦隊総司令官坐乗と聞くとそれだけで不沈艦のような印象を受ける。

後年ダンテの『神曲』煉獄篇第三十歌の五八行以下を訳す時、その坐乗の語を用いようとしたが、それでは何のことかわからない、といわれたことがある。

ii 私はパリに長く留まって勉強したかったから、ありとあらゆるアルバイトをしました。一度フランスの映画『トムソン少佐の手記』にエキストラで日本の水兵として引っ張り出されたことがある。戦後の日本には海軍はない、といったが先方は聞いてくれない。そもそもダニノスの原作にも日本水兵は登場しないのです。水兵帽をかぶらされたが、フランス海軍の水兵帽は頭の天辺に赤い丸い房がついている。Bonnet à pompon rouge といいますが、そのボンボンだけは幼稚園児みたいで日本の海軍さんにふさわしくないからと頼んで取ってもらいました。

iii 1956年の『戦場にかける橋』という世界的にヒットした映画でも早川雪洲演ずる日本部隊の指揮官はタイからビルマに通ずる鉄道建設でクワイ川に橋をかけねばならないが、その技術がなくてア

レック・ギネス演ずるイギリス兵捕虜の技術力を借りたということに話の筋が設定されている。実に馬鹿げた設定ですが、白人優越の思想は白人優越の神話が日本海海戦で打ち破られた後も続きました。

iv Yorisaka は鰺坂と日本語表記すべきかもしれないが依仁親王の名前が連想に浮かんだので依坂と訳しました。

v 私自身はパリへ行きファレールの『日本海海戦』を読むことで、明治日本の国造りの努力をさらに強く再確認しました。それは江藤淳氏風にいうと私どもの祖先の日本の国造りの努力を肯定することであり、個人的には学生のころ自分が俗物とみなしてたてついた父、私の父は戦前のドイツで化学技術を学んだエンジニアですがその父の生き方の肯定にもつながり、私にとってもそれなりに「一族再会」でありました。

江藤淳氏は昭和36年、島田謹二教授の『ロシヤにおける廣瀬武夫』を読んで、自分の祖父たちの海軍の意味を肯定的に再発見した由です。それが江藤氏の一族再会へのきっかけとなったのでしょう。あの本のおかげで救われたと江藤さんは私に言いました。私は実はファレールについての論を江藤氏が編集していた『季刊芸術』に1968年東大紛争の最中に寄稿して氏の知己を得た者です。

vi 豊後竹田の廣瀬神社の参拝者の名前を記した綴りに島田先生はこう書いています。

昭和三十五年八月七日

廣瀬武夫中佐の生涯の一節を研究調査のため来り感懐きはまりなし

この日は六十三年前ロシヤに留学するため中佐がヨコハマを出港せし日に当る

神殿にぬかづけば細雨音なく俄かに降りきたり英魂も照覧あるが如し

東京大学比較文学教授 島田謹二

vii そんな返事をよこした人は子安宣邦氏で今でも『朝日新聞』などに寄稿しておられます。

viii 江藤淳氏は身内に海軍関係の方が多くいたが、「第二次大戦にいたる迄の、海軍という組織の墮落については、日清・日露を戦った者の孫としていろいろいいたいことがあります」という認識を示した手紙を私が市丸利之助少将について本『米国大統領への手紙』を出した時いただいたこ

とがあります。

ix それは日本では日中友好のシンボルと思い込んだ上海の大製鉄所建設にまつわるNHKの『大地の子』というテレビが、日本では連日連夜国民的感動を呼びましたが、中国では『大地の子』は公開すらされませんでした。中国人の俳優が善意の中国人養父母として描かれているにもかかわらずです。中国最大の製鉄所が日本の技術援助やODAで造られたということを国民に知らせたくなかったのでしょうか。日本人の手を借りて造ったということを恩に感ずるよりは忌々しいと心中で思っているからでしょうか。

だがそういえば日本人も軍艦三笠は誇りにしたが英国製ということはあまり言いたくなかったのではないのでしょうか。

x それというのはそれまでの文学者は文士だけで固まって文学のみを良しとし、軍人の悪口をいって人気を博していました。それが戦後の日本文壇であり論壇であり思想風潮でした。自分たちだけで別個の世界を形作って、その中での唯我独尊です。そこから軍人差別というべき見方も生まれました。そうした見方のチャンピオンは戦後民主主義の旗頭大江健三郎氏で、日本の女性にたいして自衛隊員とは結婚するなという趣旨の発言もいたしました。

もちろん戦前の軍人もお山の大將でしたが、戦後の文士もお山の大將でした。しかし失礼ながら日本の思想界における大江氏の運命は日本の政治界における土井たか子氏とほぼ似た運命をたどるのではないかと私は観測しています。

軍人の方も軍人さんだけで固まってほかの人の悪口を言っておりました。その団体精神というかこの一筋に連なるといふ日本の縦社会的な特徴は、竹山道雄氏が『昭和の精神史』で指摘する *esprit de corps* と通じるものでしょう。これが悪かったことは間違いありません。日本の社会内に国内国家ともいふべき軍部が出来、軍部と政府と一致して行動が取れなくなりました。

私はフランスの文化で良い点は、外交官とか軍人とかがその文章によってアカデミー・フランセーズに選ばれ職業を超えた社交が行なわれている点だろうと思います。日本でも外務大臣陸奥宗光の『蹇蹇録』など文章作品として立派です。鈴木貫太郎大將の自伝、今村均大將の回顧録なども読

んで教えられるところが実に多い。しかし日本の国文学史家はこうしたものを尊重しません。そのような小説優位の見方は間違いだと私は信じています。

島田謹二氏は明治日本文学の最高の文章は「敵艦見ユトノ警報ニ接シ、聯合艦隊ハ直ニ出動敵ヲ撃滅セントス。本日天気晴朗ナレドモ波高シ」ではないかと述べましたが、一つの見方かと思います。

xi それと同じことは司馬氏が非常な刺戟を受けた島田先生の本にもあります。そこでは海軍軍人広瀬武夫と帝国大学教授の小野塚喜平次の交友が語られています。ちなみに島田教授は敗戦で台北帝大から引揚げ第一高等学校の教授になり、日本の知的優秀、真のエリートは文学畑にいないのではない。明治の一番の優秀は政治や軍事の方に行ったのだ、とさとした、それで文士の研究から明治の海軍軍人の研究へ方向転換したのだと繰返し述べました。それで比較文学研究の方法を文学者の外国体験だけでなく軍人の外国体験にも応用したとのことでした。

この説明には多少牽強附会の気味も無しとしませんが、私はこの島田教授の学問上の方向転換をまのあたりに見て拍手喝采した一人でした。丁字戦法を用いて敵前回頭をあえてする学問上の司令官を見る思いがしました。昭和 35 年という学外では安保騒動で騒然としていた時期で、ほかの大学院生は必ずしも釈然としていませんでした。

しかし私は外国に 5 年いて西洋の新聞を読んで別の情報空間で暮らしてきたから、全体主義諸国と対峙するには英国と米国の関係に近い関係が日本と米国の間に出来ればよいと内心思っていました。それだから日本のマスコミがたきつけて大騒動になった安保騒動などマス・ヒステリーとは思えなかったのです。それから日本人の海外体験は明治も昭和もそれほど違いはないのだ、と認識しました。またたとい職業が違おうとも外国体験としては共通する要素は多いのだ、ともさとりました。それで私なりに明治の軍人の海外体験を追体験できると思った次第です。

xii 秋山出発の更に 3 年後の明治 33 年には東大時代の同級生で俳句仲間の熊本高等学校教授夏目漱石も留学することとなりました。当時は官費の海外留学は珍しかったから新聞に出ました。正岡は

夏目の上京を待ちながら熊本へ手紙を送り、

からだ尋常ならず、俳句雑誌『ホトトギス』の方は二ヶ月全く関係せず、

五年十年生きのびたりとも靈魂ハ最早半死のさまなれば、全滅も遠からずと推量被致候

と近況報告し、

年を経て君し帰らは山陰のわかおくつきに草むしをらん

という歌も添えました。「全滅も遠からず」という軍隊用語を用いて自分の死を笑っているところに正岡という明治の男っぽい詩人の自己客観視から生じたユーモアさえ感じられます。

xiii 戦艦長戸や陸奥が聯合艦隊の旗艦となった時、あの独特の形に日本の城の天守閣に似た形を認めた人もいました。日本製の主力艦が日本人の手で製造されたという誇りを、私は昭和初年、子供心に覚えています。

太平洋戦争が始まるまでは平川家は毎夏内房に行きました。すると沖合に艦隊が集結し、陸地に向けてサーチライトの照射をすることがあります。浜の栈橋に新聞を持参してその明かりで読めた、などと自慢する者もいました。時にはフロートをつけた艦載機が頭上を飛び舞うだけでなく着水して浜辺に来ることもあります。子供心にわくわくしました。もっとも私の母親はあれだけ沢山の軍艦が集結すると水兵さんのうんこが流れてくるから海水浴をしている時気をつけなさい、などといいました。

昭和 16 年の夏に大貫の海岸で永野修身大將がお孫さんと海水浴していました。私人として休暇中のことだったのでしょう。私は小学校四年生でしたが、永野大將が褌でなく海水パンツをはいていたことを覚えています。そのころの私にとって聯合艦隊という言葉の響きは真にすばらしいものでした。それというのは日本人の集団的記憶の中に日本海海戦を戦って勝利した聯合艦隊というプラス・イメージが刻み込まれていたからです。

長門・陸奥などの戦艦の名前を子供は記憶しました。速力はノットという 1 海里 1,852 メートルが単位で知られていました。英国の数え方がそのまま日本海軍に定着していたからです。16 インチ砲という言い方もしたが、こちらは 40 サンチ砲

16 門などともいいました。本文中でも述べたように、主砲の口径や数を覚えていたのは、今の子供が野球選手の打率とか打点、安打数を覚えているのと大差ありません。

そうした私は平均的な日本の子供でした。しかし日本の主力艦が日本製であること、そして秘密だが日本がさらに大きな戦艦を建造中であることを誇らしく感じていました。昭和 19 年の 6 月ラジオの報道でマリアナ諸島に「聯合艦隊出動セリ」と聞いて、これで日本は勝つ、と中学 1 年生は心が躍り上がるように思ったものでした。歴史の進み方に比べて私たちが受取る情報知識には遅れがあり、人間の意識は惰性で歴史を解釈してしまうものです。

その昭和 19 年の夏にも私は田舎で、日本はワシントン軍縮会議で米英に対し 5・5・3 の割合でしか主力艦を持つことを許されなかった、けしからん、というロンドン会議に反対して割腹自殺した草刈少佐をモデルとしたような劇映画を見て、子供心に共感していました。

xiv 幼稚園のころの私の最良の相撲取の名は大和錦といいました。そのころはテレビもないし年に 2 回、それも 1 回 15 日興行しないこともあって実際に見たことはないのです。両国の国技館へ行ったこともない子供でしたが、それでも名前だけで大和錦をひいきにしたのです。大和魂という精神力に対する信仰は、本人たちがどこまで自覚していたかは別問題として、日本の物質的な力の不足を補うものとしてもいわれてきたという面もあるのではないのでしょうか。インドも国が貧しかった頃はインドのインテリはインドの精神性ということをしきりといったように記憶します。

xv 日露戦争の最中に米国の第一流の月刊誌だった *Atlantic Monthly* に英語で大和魂 *The Japanese Spirit* を寄稿した人にはラフカディオ・ハーンの友人だった雨森信成もいます。英国で同じく *The Japanese Spirit* を著して日露戦争の最中にロンドンで出版に成功した人には岡倉由三郎もいます。岡倉天心の 6 歳下の弟で明治・大正・昭和前期の日本の英学の大家でした。岡倉由三郎編の研究社の『新英和大辞典』を使った人は本席にも必ずやおられることと思います。夏目漱石より一つ年下でしたが、どうやら漱石と違ってロンドンでイギリス人の間にうまく溶け込むことができたらしく、

ロンドン大学で講義したものをまとめて書物としました。当時の英国の文豪ともいべきジョージ・メレディスが日英同盟の誼もあってでしょうが、岡倉のそのパンフレットに序文を寄せています。

xvi かつて秋山真之は米西戦争の直後、米人記者に質問され、サムソン長官の功績を要点をついた英語で的確に述べ、それが新聞に特筆されたことで、長官の信用を博したようです。島田謹二『日露戦争前夜の秋山真之』(東京、朝日新聞社、1990 年) 頁。

21 世紀の日本では、試合直後にマイクを突きつけられ、見事に受け答えする選手が多くなりました。松井秀喜選手など疲れていても礼儀正しく答えます。もしこれで英語で当意即妙に答えれば、国際舞台で花を添えるのではないのでしょうか。人間、土地の言葉で話すことが大切です。小泉首相以下も国連で英語で演説しました。(といってもその場で質問に英語で答える力は首相も外相も総務相にもありません。)
「日本の首相は日本語でやれ」などという日本主義を私は支持しません。通訳を介しては、女に愛を語れない。外交も学問も、外国語で訴えてこそ外人の心を動かすものです。だが先日も「東大で小泉八雲の国際学会を開くのに英語とは何事か」と抗議を受けました。日本語だけではハーンの価値を外国人に説明できないではありませんか。そんな土着派日本主義に私は反対です。その意味では私は国際派ですが、ただし国際主義といっても、モスクワ本位のインターナショナリズムは嫌い、キリスト教本位の普遍主義、ドル本位のグローバリズムにも警戒心を抱いています。好きなのは国際派ナショナリストで、廣瀬武夫など明治の海軍軍人はその意味で尊敬している次第です。

[編集注・本稿は、基調講演のために用意された講演草稿に基づき作成されています。したがって、実際の講演では、時間の都合その他により割愛された部分も収録されています。]

16 項にのぼる稿末注は、同講演草稿より転載したものです。次ページ以下の大和魂という言葉の来歴に関する「付録」も合わせてご参照ください。]

日本海海戦 100 周年記念歴史セミナー

「世界を変えた日露戦争」

基調講演

「亡びるね」

— 日本における国際主義と土着主義の抗争 —

付録

ここで大和魂の問題を巨視的に把握するために、大和魂という言葉の来歴について考えてみたいと思います。大和魂とは何であったのか。日本人が大和魂を口にするようになったのは外国、とくに中国を意識するようになってからだと思われます。『源氏物語』は西暦 1000 年前後に書かれましたが、「乙女」の巻に、

猶、才を本としてこそ、大和魂の世に用ひらる方も、強う侍らめ。

とあります。この才とは漢才、すなわち漢詩文を読み書きする能力で、そのような学問的基盤があってこそ生得の大和魂も世に大いに用いられ得るのだ、と紫式部は作中人物の口を借りて言わせています。菅原道真が述べたとかいう「和魂漢才」という理念は、実際は室町時代に再定義されたものと聞きましたが、おそらく紫式部のこの発言を踏まえたものでしょう。

しかし平安朝の昔に外国文化摂取のそんな先例がすでに出来上がっていたからこそ、佐久間象山以降の近代日本は「和魂漢才」から「和魂洋才」へ、「漢」を「洋」に置き換えることで、方向転換し得たのです。福沢諭吉が近代日本の最大のイデオログとなった所以は、日本人に漢籍よりも洋書を読ませ、漢学を捨てて洋学を学ぶこと、いいかえると中国を模範と見立てることをやめさせて英国を範とすること、さらにいいかえると Japan's turn to the West という文化史上の一大方向転換を主張し、かつ実現させたからでした。

ところで和魂漢才の和魂と和魂洋才の和魂と同じかという、和魂が変化しています。紫式部が和魂漢才を話題とした時の和魂は中国から漢文化がはいる以前の大和心でした。それでは和魂洋才の和魂とは何か。佐久間象山は和魂洋才のことを東洋道徳西洋芸術と呼んだ。(なおこの芸術は今日

の技術 technology の意味です。) 東洋は道徳において優れ西洋は技術において優れているから、採長補短で双方の良いものを一身に備えたい、という佐久間の主張です。その際の東洋道徳の中身とは武士道もあるが儒教道徳も当然含まれています。ということは 19 世紀の和魂はそれを日本精神、さらには東洋精神と言い直すと、紫式部の時代に和魂漢才といわれたもののすべてがその中にはいつてしまっている。そのように和魂の内実は変化いたします。

しかし自分は日本人であるから純粋の大和魂を維持したい。外国文化、とくに漢文化の汚染は御免蒙りたい、という人も出てきました。18 世紀の中頃にそのような日本の文化的ナショナリズムに目覚めた人は本居宣長であります。徳川時代の日本の学問は漢学が主流でありました。歴史というと日本の歴史を学ぶのではなくて中国の歴史を学ぶ。それは日本人としておかしいのではないかと考えたのが本居などの国学者であります。

ちょうど近年、台湾で歴史というと台湾の歴史を学ぶのではなくてもっぱら中国大陆の歴史を学ばされる、それは台湾人としておかしいのではないかという反省が台湾人の間から生じました。台湾人としてのアイデンティティーを求める動きが生じました。漢字では「自己認同」と書きます。それからわかるように本居宣長の国学者の運動は今日の言葉でいえば日本人としてのアイデンティティーを求める運動であったといえましょう。

ただ 18 世紀の日本ではアイデンティティーなどという片仮名や横文字は用いなかったから、それで大和魂といったのであります。本居が大和魂とは何かときかれて、

敷島のやまところを人間はば朝日ににほふやまざくら花

と有名な歌で答えた話は有名ですが、同時代人の上田秋成は『胆大小心録』(一〇一)でこう冷やかしました。

やまとだましいと云ふことをとかくにいふよ。どこの国でも其国のたましいが国の臭気也。おのれが像の上に書きしとぞ。

敷島のやまと心の道とへば朝日にてらすやまざくら花

とはいかにいかに。おのが像の上には、尊大

のおや玉也。そこで、「しき島のやまと心のなんのかのうろんな事を又さくら花」とこたへた。

秋成は宣長に向って「又なにをほざくか」と冷笑したのであります。それというのも自国の精神の過度の強調は時に滑稽味を帯び、時に夜郎自大となります。18 世紀の我が国における国学の発展は、日本の学問世界における圧倒的な漢学支配に対する反動としては健全なものです、それが大和魂の強調となると臭みを帯びます。それというのも文化的ナショナリズムはしばしばナルシズムのあらわれだからです。それが本居宣長やその門人に見え隠れするから上田秋成は国学者でしたが冷やかさずにはいられなかった。

私の見るところ日本は軍事的には大陸の勢力に征服されたことはないが、文化的には多くを漢字文化圏や西洋文化圏から学んだ。それで混合文化が生れた。字も漢字仮名混じり、宗教も神仏混合、服も洋服和服、そうした日本について私は漢文明に汚染された、とか西洋文明を排除せよ、とかいう気持はないのです。食事も好みに合わせて和食洋食にすればよろしい、という説です。では精神の滋養物はどう取るか。大和魂とは日本精神への回帰を意味することでしょうか。

大和魂がさらに声高に唱えられたのはペリー艦隊の来航以後です。明治維新にさきがけて刑死した吉田松陰は、

身はたとへ武蔵の野辺に朽ちぬとも留め置かまし大和魂

という辞世の歌を残しました。紫式部は観念的に海の彼方の漢文明を理想化する漢学者をひやかした女性で、彼女がやまとだましといいた時、やまとだましにはたおやめぶりのなにかがまつわっていただろうと思います。ところが幕末維新の志士の大和魂からはそのような女性的な含蓄は次第に失せ、ますらおぶりの意味合いが支配的になります。それというのは大和魂は一部の人が考えるようなその内実によって定義された観念ではなく、大和魂は時代や国際環境によって変化するからです。それは人間のアイデンティティーが外との関係で変化するのと同様です。外との関係による日本人の自己把握であり、自己主張だからです。

大和魂ということは日清戦争の時から広く言

われていました。中勘助の『銀の匙』という大正 2 年に発表された自伝的小説には、

(日清)戦争が始まってから(小学生)仲間の話は朝から晩まで大和魂とちやんちやん坊主でもちきつてゐる。先生までが一緒になつて犬でもけしかけるやうな態度で何かといへば大和魂とちやんちやん坊主をくりかへす。

と明治 27 年当時の様が出ています。

平川祐弘